

ミニきりゅう2021

ミニきりゅうは、創立65周年記念事業として
桐生青年会議所が取り組む初めての試みだ。

同所の理事長の黒澤卓也さんと会員の皆さん、

参加する子どもたちに事業内容や展望を聞いた。

子どもの成長に寄り添い 見守る記念事業を企画

公益社団法人桐生青年会議所（以下、桐生JC）が、今年で創立65周年を迎える。同法人は1949年、明るい豊かな社会の実現を理想とし、责任感と情熱をもつた青年有志により結成され、地域に貢献する活動を続けてきた。

65周年を記念して今年は、子どもたちの手で作られ運営されるまち「ミニきりゅう」を事業として行う。「地域の子どもたちの成長につながるものを作成したい」という会員の声が多数ありました」と、桐生JCの理事長を務める黒澤卓也さんは語る。

社会の成り立ちを学び 生きた教育に触れる機会

ミニきりゅうの運営スタッフとして、桐生市とみどり市から集まつた子どもたちは40人。4月から始まった月に1度の会議で、どんなまちにするかのアイデア出しやルール作り、市歌、大道具の制作などに精力的に取り組んでいた。

同事業は、桐生市とも協力関係にある。子ども市長を選ぶ選挙では、桐生市の選挙管理委員会の協力を得て、実際の選挙と同じ投票所を作り、立会人をおいて投票が行われた。こうした取り組みに桐生市は、桐生市との協力を重視して、実際に投票所を作り、立会人を置いて投票が行われた。こうした取り組みに桐生市は、桐生市との協力を重視して、実際に投票所を作り、立会人を置いて投票が行われた。

以前中央が第65代理事長の黒澤卓也さん。右に創立65周年実行特別委員長の岩崎啓行さん、左に創立65周年記念事業部会長の新井慎吾さん

生J Cでは観察を重ねて、同大教授のアドバイスのもとミニきりゅうの開催を決定した。

黒澤理事長は、「コロナ禍で開催を見送る選択肢もありました

が、桐生JCは時代の問題点と向き合い、解決していくこと結成された団体です。万全の対策で臨もうと皆で決断しました」と、力強く語る。

下準備は新型コロナウイルス感染症が、まん延する以前から始まっていた。モデルにしたのは、ドイツで30年以上にわたって開催されているミニ・ミュンヘン。7歳から15歳までの子どもたちが運営する小さな都市で、3週間も開催される。来場した子どもたちは、まちの中で仕事に就き、仮想通貨の報酬を得て、納税と消費を行なう。サービスを提供する側とされる側、納税しそれが何に使われるのか、社会の仕組みを学べる機会だ。まちそのものも、子どもたちがルールを決めている。

神奈川県の田園調布学園大学でも授業の一環として、ミニたまゆりというまちを作つており、桐生市子ども会リーダー

ミニきりゅうは9月4日、5日2日間にわたって実施。小学1年から6年生を対象に各日400名を募集する（現在は募集終了）。会場に桐生JCのメンバーもいるが、基本は子どもたちの自治により運営される。ボランティアスタッフとして市内の高校生も参加。桐生市子ども会リーダークラブ（KLC）、桐生商業高等学校ビジネス部、桐生第一高等学校インタークト部、樹徳高等学校インタークト部の生徒たちが、子どもたちをフォローする予定だ。

生市の荒木恵司市長は、「初めての試みなので、子どもたちには遊びのびと楽しんでほしいですね」と笑顔を見せる。

市長になつたのは、大久保里胡さん。「安心安全、笑顔の街にする」をキヤッチコピーに演説。市長の仕事は公約の実現と、良いまちにすることです。困っている子どもたちを第一に考え、フォローするのが市長としての仕事だと思つています」と、頼もしい。

副市長のラハマンミシャさんは、「自分たちが好きなまち、実現したいまちを作れるところが良いと思いました。アドバイスももらえたけれど、ほとんどのアイデアは子どもの意見です。こういう経験をしたことがなく、とても楽しいです」と、創造する楽しさを語る。

同じく副市長の佐藤創さんは、皆の意見をまとめる際に、公平さに気を配っているという。「グループワークで違う学校の人と話し合い、帰る頃には仲良くなっています。相手のことを知るのが楽しく、理解する輪が桐生市全体に広がる気がしました」と、まち作りへ喜びと期待を込める。

子どもたちは3つのチームに分かれ、まちの運営方法、商店街や名物グルメのアイデア作り、広報活動を行う。当日は裏方に回る

ミニきりゅう

副市長 ラハマンミシャさん
大久保里胡さん
副市長 佐藤創さん
桐生市 荒木恵司市長

新しい名物グルメを生み出すため試作を重ねる渉外チーム

運営チームが、まちの職業の一つである消防署を作成中

行政チームは市長選挙や流通させる通貨などを決める

準備する内容は子どもたちが決め、率先して手を動かす

準備する内容は子どもたちが決め、率先して手を動かす

大人たちが舌をまく発想と行動力で、9月には小さなまちが誕生する。子どもたちの自治のもと、まちを訪れた子どもたちが働く、報酬を得、消費する。社会の縮図を模したまちは確実に、子どもたちの成長の糧となるだろう。

